

光を探して

東北地方に大きな地震と津波がやってきた。気仙郡には一〇メートルを越える津波が押し寄せた。時は、一八九六年、明治二十九年、三陸地震のことである。

そのおなじ頃、ヨーロッパはヴィルヘルム・コンラート・レントゲンによるX線の発見に沸いていた。その年、X線の蛍光の研究をしていたアンリ・ベクレルが実験の途中、ウラン塩が写真乾板を感光させたことから「放射線」を発見することになる。そしてその翌々年、「放射線」の研究をしていたマリ・キュリーが「放射能」という言葉を生み出すことになる。「光」の歴史の幕開けである。

そのおなじ年、私の祖父、小林滋は愛知県あいちの拾石ひろうしに生まれた。奇しくも彼はその誕生とほぼおなじ時期に生まれたレントゲン学を、X線・放射線学を学ぶことになる。上海事変が起き上海へ軍医として出征するまでは、弘前ひろさきの陸軍病院のレントゲン科で働いたという。戦後も町のレントゲン医として開業していた。

私が生まれるのと同じように入れ替わるように亡くなったので、私は祖父の記憶を持たないが、彼の写真は残されている。軍服を着た彼とその家族写真。そこにはまだ少年だった父も一緒に映っている。その写真を手に、私はもうとつくにその父の年齢を追い

小林 エリカ

プロフィール
1978年東京生まれ。作家・マンガ家。著書『マダム・キュリーと朝食を』（集英社）が第27回三島由紀夫賞、第151回芥川龍之介賞に選出。『放射能の歴史をめぐるコミック』の子ども1、アンネ・フランクと実父の日記を巡るノンフィクション『親愛なるキティーたち』（以上、リトルモエ）、作品集『忘れられない』（青土社）など、ユニット〈kviná〉としての活動も。
<http://rikakobayashi.com>

越していることに気がつく。そして、もうすぐその祖父の歳さえも追いついていくのだと考える。いま、祖父だけではなく、父ももうこの世にはいない。

東北地方には、ふたたび大きな地震と津波がやってきた。福島第一原子力発電所の事故があり、放射性物質があたり降り降った。

私はその目には見えない「光」を、その歴史を掴みたくて『光の子ども』と『マダム・キュリーと朝食を』というマンガと小説を書いた。

マリ・キュリーが残した実験ノートを見せてもらったことがひとつのはじまりだった。その資料の殆どはバリの国会図書館にあるのだが、どういうわけか一冊だけ東京の大学図書館に貴重図書として保管されていたのだ。白い布張りのノート。表紙を捲ると丁寧な筆記体の文字やグラフが並んであった。そこへガイガーカウンターを近づけると、今も微かに数値が上がる。ラジウムやポロニウムなど放射性物質を扱っていたマリ・キュリーの手が触れた部分の数値が少しだけ高いのだと教えられた。

マリ・キュリーは死んでもうこの世にいない。けれどそこかしこに、いまここに繋がる確実な痕跡がある。目には何も見えない。

月刊 みんなぱく

10月号目次

- | | |
|--|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
“光”を探して
小林 エリカ</p> <p>2 特集
未知なる大地 グリーンランド</p> <p>2 世界最大の島の自然と文化
岸上 伸啓</p> <p>4 四六〇〇年前からのグリーンランドの歴史
スチュアート ヘンリ</p> <p>6 グリーンランド・イヌイットの文化
齋藤 玲子</p> <p>8 世界のなかのグリーンランド
——ニュー・ノース時代の開発と自治
高橋 美野梨</p> <p>10 集めてみました世界の〇〇
船編
飯田 卓</p> <p>12 みんなぱく Information</p> | <p>14 文化遺産おもてうら
世界無形文化遺産と民族のアイデンティティ
——南部アフリカ、チェワの祭りから
吉田 憲司</p> <p>16 多文化をあきなう
生産者と消費者を結ぶスタディツアー
——キリマンジャロ・フェアトレード・コーヒーの村へ
辻村 英之</p> <p>18 味の根っこ
ウイスキー、ラム そしてグラツパ
金田 純平</p> <p>20 人間学のキーワード
リスク
木村 周平</p> <p>21 異聞逸聞
ガーナの楽しい選挙
浜田 明範</p> <p>22 制服の世界、世界の制服
呪術師に変身! ——東北タイにおけるバーサバイ
津村 文彦</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|---|